

話すことを「封印」していた私が

岡山県高梁市立宇治高等学校 3年 見尾 緩菜

「なんでしゃべらんの。しゃべれや！」この言葉を聞くのが嫌でした。

私には吃音症があり、言葉を出そうとしても出なくなったり、どもって上手く話せなかったりします。発症は幼稚園からでしたが、幼かった私は気にせず生活していました。でも、小学校では極度の人見知りになり、しゃべらなくなりました。高学年になって委員会の放送をする時の苦痛は大変なものでした。チャイムを鳴らしても話し始めるまでに時間がかかり、「言わないのにチャイムを鳴らしちゃダメでしょ！」と上級生に怒られたこともあります。また、劇の発表会で台詞を言うのに15分以上かかったことは忘れられません。ただ、5年生の発表会は違いました。「キョロキョロしない。」「もっと大きな声で。」私は先生があえて厳しくしているのをわかっていました。「自分は女優だと思ってやってごらん。」母にも背中を押されました。母の言葉は私のお守りでした。そして、本番で大きな声を出せたことは今でも私の宝物になっています。

ところが、中学校に進むと私は誰かと一緒に発言することが当たり前になりました。もちろん、それは友達や先生がたくさんサポートしてくれていることで、感謝しなければなりません。しかし、私自身の成長は何もなかったのです。自分から前に進もう、積極的に話そうとしなくなったのです。とうとう、私は話すことを「封印」してしまいました。

私が自分にかけてこの「封印」を解いてくれたのが宇治高校です。私は一人でも発表できるようになったのです。「なぜ苦手な発表をしなくちゃいけないの。」初めは、そう思っていました。「みんなを待たせてしまう、迷惑がかかる。」という気持ちが一番でした。でも、クラスメイトは私を待ってくれました。授業での発表も、終礼でのスピーチでも、いつも私と一緒にリズムをとって応援してくれました。そして先生は、話しやすくなるテクニックを色々と考えてくださいました。私がよく使っているのは、言葉の変換です。出にくい音を別の音に変えて発音する方法です。例えば「来週」が言いにくければ「次の週」と変換します。とても簡単な方法です。書いてある通りに読まねばという私の思い込みが崩れたのです。もちろん、私が一人で話せるようになったのはテクニックだけではありません。困ったら助けてくれるクラスメイトや先生方が、いつもそばにいてくれるからです。私一人では、ここまで成長できなかったと思います。

文化祭の演劇や地域の「宇治物産祭り」も私を大きく成長させてくれました。練習や準備の中では意見がぶつかることもありました。でも、先生が教えて下さいました。「全員が一生懸命だからぶつかることもある。適当にやっていたら言い合いになったりはしない。」と。今まで人とぶつかることを避けるため自分の意見は飲み込んできた私は、とても大切なことを学びました。演劇の練習中、初めて上手く台詞が言えた時にみんなから起こった拍手もよく覚えています。本番も大丈夫でした。しっかり台詞を言うことが出来ました。母を初めとした観客のみなさんから「いい劇だったね。感動したよ。」と言葉を掛けてもらいました。私の宝物がまたひとつ増えた瞬間でした。

そして、3年生になった私にさらなる勇気を与えてくれる出来事が起こりました。新しい仲間が転校して来たのです。彼は私と同じ吃音症を持っています。自己紹介の時、彼は言葉が詰まっても一生懸命話そうとするのです。私と全く違って見えました。恥ずかしさを恐れず、堂々と発表している彼の姿に背中を押されました。彼は、普段の生活でも自分から積極的に声を掛けたり、授業でもわかっていることは、どんどん発信しています。私にも「普段、どんな本を読んでいるの？」と聞いてくれました。すごく嬉しかったです。

彼を見ていて、私に足りないことは何かに気がつきました。それは「堂々さ」です。私は人前に立つと、つい下を向いて声も小さくなってしまいます。堂々とできないのです。確かに吃音症を完全に治すことは難しいかもしれませんが、でも、今、自分に足りないものは自分で変えられます。逆に言えば、自分でしか変えることは出来ません。この作文を全校の前に立ち、しっかり顔を上げて初めから終わりまで一人で発表できたことは、私に考えてもいなかった自信を与えてくれました。「苦手なことでも勇気を出して挑戦すればいつだって『封印』を解くことが出来る」宇治高校で私が学んだことです。卒業後の私にどんな困難が待ち受けているか、不安がないと言ったら嘘になります。でも、「ゆっくり、じっくり、何度でも」、宇治高校のキャッチフレーズを忘れず、自分の考えをちゃんと発信していこうと決意を新たにしています。